

「新薬から天然生薬へ変更したわけ」

漢方相談あうん堂薬局 代表 うめだ 梅田 ひでお 秀男



住 所: 加古川市野口町良野154-13
T E L: 079-427-8138
営業内容: 漢方系相談薬局

学生時代は、漢方といえど何か古典的遺産に思えて最先端の化学を学びたく、製薬化学科の有機合成理論などに没頭していました。父が倒れたことで東京のラジオアイソトープ研究所から神戸の市民病院薬剤部に転職しましたが、規模が大きい分取り扱った薬品の種類も多く、一般調剤薬は約千種類、注射薬や麻薬、製剤用の試薬なんかを合わせるのと二千種ほどあったでしょう。しかし、そのお陰で化学薬品については熟知でき、気付けば31年もの長きに渡り在

職しました。後半、実務を離れて出向した「お薬相談室」では、服薬後の異常や副作用などの相談から苦情まで、多くの患者の本音を聞くことができたのも、今となっては良い経験でした。そんなある時、一見してアトピー性皮膚炎とわかる青年が入ってきました。「もう5年近く通っているが改善の兆しが無く、どうすればよいか」と。私はこの時化学薬品の限界を感じました。「なんとかできんものか」。これが漢方を学ぶきっかけでした。

病院勤務の帰りに元町の漢方薬局で手伝うことになり3年、その後東京漢方学会や上海中医药大学日本校などで学びました。新薬と違い漢方系は奥が深く、理解するのにかなり苦労しました。恩師から「漢方薬は新薬と同じようなマニュアル的な処方（病名漢方）をしてはいけない、必ず証をとってから薬方を決定せよ」と厳しく教わりました。例えば「風邪をひいた」といつて、症状の違いに関係無く銀パツクの葛根湯を毎食後に飲む、これではまったく意味をなさないので。「風邪に傷められて傷寒となり項背強張り、汗無く悪風する（肩・背中が強張り、汗は無いが軽い寒気がする）」などの証候が現れた時に葛根湯（熱い湯液をフーフーと）を用いるのです。すると、

服薬後に背中に微熱を感じ、再服（約2時間ごと）すると背中から発汗し始めます。実際は2〜3回目くらいで発汗し始め、全身びしょびしょになる人もいます。この時点で8割ぐらいの風邪は飛んでしまっています。これは葛根湯証といい約二千年位前に書かれた傷寒雑病論に出ています。著者は後漢の太守（今の県知事相当）張仲景、あの世に行ったら一度会ってみたい人達の一人です。何度も壁にぶち当たりながらも、漢方を始めてから今年で早や12年が経とうとしています。

さて、漢方薬局に距離は関係ないとは聞いていましたが、昨年1月、地球の反対側仏国在住の日本人女性から連絡があり、重い血液病で入院を繰り返しているとのこと。メールで、まずは食事療法や化学薬品による副作用の軽減法を伝えました。4月に実家に帰られて3か月程煎じ薬を飲まれ、バツグいっぱい煎じパツクを詰めて再びフランスに帰られ、病院での検査結果も良くなったと連絡が入った時は本当に嬉しかったです。その後米国在住の方々へも送付しています。今後は海外で活躍している日本人の方への応援と、いま取り組んでいる「痛み」と「喘息」などのさらなる研究にやり甲斐を感じている毎日です。